

生薬解説 212 せー7

音順	生薬名	中医の性味・帰経	中医の用量
		中医学生薬解説、参考・使用上の注意 および中医学以外の生薬解説・生薬学解説	
せー7	せいたい 青黛	鹹、寒 肝	1～3g、丸、散に入れる。 外用には適量。
	中医生薬解説		
	マメ科のキアイ・キツネノマゴ科植物・タデ科植物から製したインジゴを含む粉末	<p>解毒医瘡 火毒瘡毒（皮膚化膿症）に、黄柏・石膏・滑石などと粉末にし油で調製して外用する。口内炎、咽喉潰瘍、咽の腫脹疼痛などに、竜腦と共に外用する。結膜炎に、黄連の煎汁と混和し点眼する。湿疹など滲出、瘙癢を伴う皮疹に、蛤粉・竜腦などと粉末にして外用する。</p> <p>凉血化斑 熱毒による発斑（皮下出血）に、単味で、あるいは赤芍・牡丹皮・紫草などと用いる。血熱妄行の吐血、鼻出血などに、生地黄・茅根・側柏葉などと用いる。</p> <p>清肝泄火 肝火犯肺による咳嗽、血痰などに、海蛤粉・栝楼・山梔子などと用いる「黛蛤散」。</p>	
	参考	<p>青黛は、原植物の葉や茎に水を加えて叩きつぶした後、石灰水などを加えて表面に浮いた青藍色の粉末をすくいと、乾燥させたもの。</p> <p>青黛・大青葉・板藍根は大同小異の効能を持っている。</p> <p>大青葉・板藍根は清熱涼血、解心胃熱毒に働くが、大青葉は温毒発斑、咽喉腫痛に、板藍根は大頭瘟、疔腮喉痺に、それぞれよく用いられる。青黛は解毒涼血、清肝瀉火に働くので、火熱瘡毒、温毒発斑、咳血吐血などに適する。</p>	
	使用上の注意	<p>水には溶けにくいので煎剤には入れない。</p> <p>血分の実火熱毒によらない吐衄には用いない。</p>	